



「油一」コバルト バイオレット

## それは透明性が高いか。

使用頻度の高い14色をそれぞれ13種類の塗り見本で、3種類の下地に塗るという「官能評価塗布試験」。合計546枚の評価の中に項目2としてグラデーション試験がありました。試験絵具とシルバーホワイトとでグラデーションを作成し塗布した後の「透明」の度合いを視るというものです。ここでご紹介できないのが残念ですが、項目ごとの評価を記入していく紙は性能評価判定表といひ、まるで医者のカルテのよう、そこに詳細に絵具の評価が記入されています。テスト、評価、分析。そしてまたテスト、評価、分析。この繰返しが続き「油一」のプロトタイプが形になりました。

私たちホルベイン工業と東京芸術大学油画技法材料研究室が始めた「理想的な油絵具」の研究と開発は、こうやって本当地道なテストの果てに結実していったのです。その特徴は、鮮やかな発色や肌理の細かさ、そして粘性と着色力に加えて、いままでの既製品に比べて高い透明性ということが挙げられます。本来の油絵具が持っていた、いわば絵具の原点を、現代の技術と画家の感性とが共鳴し合って完成させた一つの理想形なのです。

※「油一」(全30色)は、藝大アートプラザのみで販売中。問合せ先/藝大アートプラザ 東京都台東区上野公園内12-8 東京芸術大学内 TEL.050(5525)2102

**holbein**

ホルベイン工業株式会社  
東京都豊島区東池袋2-18-4  
TEL.03(3983)9251  
大阪府東大阪市上小阪1-3-20  
TEL.06(6723)1554  
www.holbein-works.co.jp

©「油一」が、2007年度グッドデザイン賞を受賞しました。

holbein

## 宮嶋葉一

物語を捨て、筆触を求道しつづける無頼派画家

林 洋子 || 文 森田兼次 || 写真\* ||



ドイツ、デュッセルドルフに暮らしていた93、94年頃。南仏マルセイユに住む友人を訪ねる途上、ロマネスク壁画で知られるサン・テニアン教会を訪れた



人物 1986-87 画用紙にアクリル絵具  
36.4 × 25.7cm

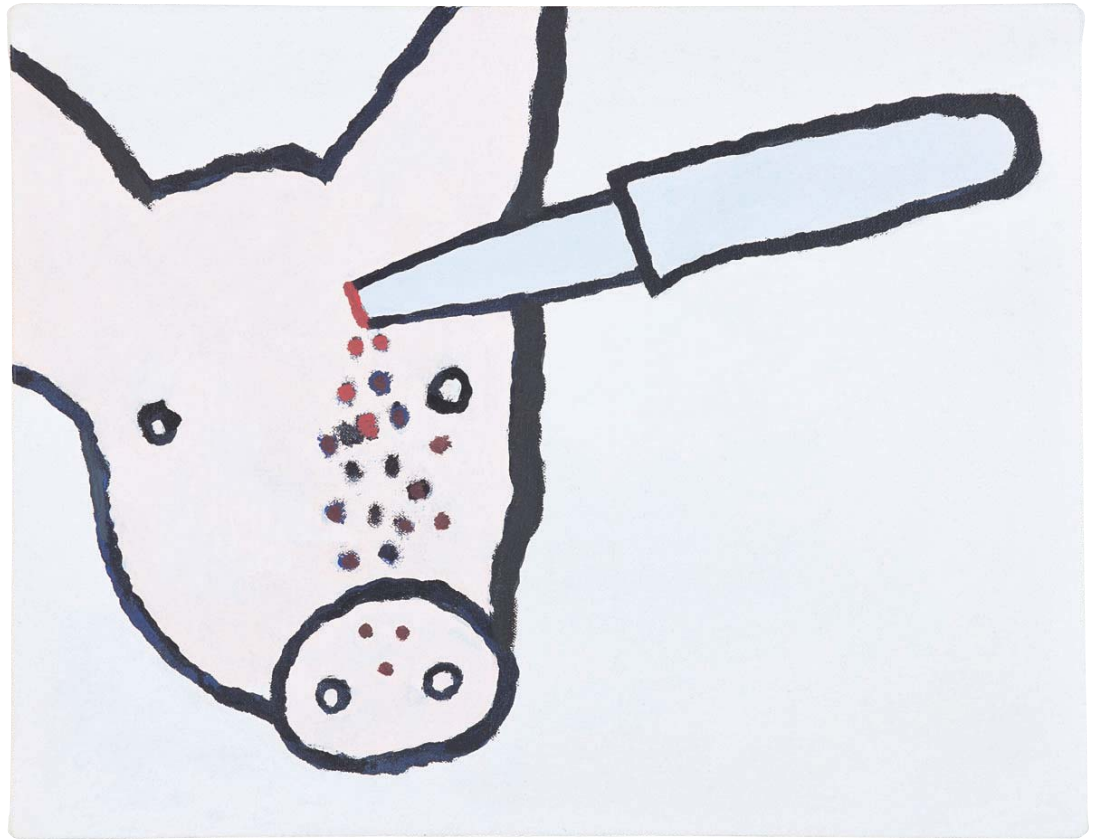
1988

「ドイツには絵を描いている人が多く、リヒター、ポルケ、バゼリッツのような国際的作家以外にも、国内の層が厚く、驚きました」

宮嶋葉一は、数学と音楽に惹かれる少年だったそうだ。確かに彼の絵画には、数式に通じる単純さと明快さ、爽快感がある、とそれを聞いて思った。中学生のときには、彼は美術の教科書で出会った、「形而上絵画」の始祖ジョルジョ・デ・キリコの《街の神秘と憂鬱》(1914)に強い衝撃を受けた。学生時代を過ごした70年代後半から80年代初頭、東京藝術大学の油画科では榎倉康二が非常勤講師を務めていた。同世代には絵画を離れてインスタレーションに移っていく作家も多かったが、宮嶋はそうした風潮には染まらず、マックス・エルンストのようなシュルレアリスム、<sup>フィギュラティブ</sup>形象的絵画に憧れ、野見山暁治に師事している。1984年、初めての個展には、花や仮面など卓上のモチーフを描いた絵画が、独特の浮遊感と不条理さをはらんで並んでいた。

予備校教師をしながら制作を続けていた1988年、34歳の宮嶋は、「外の空気を吸いたい」とドイツを目指した。その頃、この国に行く先に





『顔』はそろそろ終わりにしたい、と自覚的に変化を試みたのです。かたちや絵具の付き方に関心が向き、色はモノクロームに限定しました」

1997

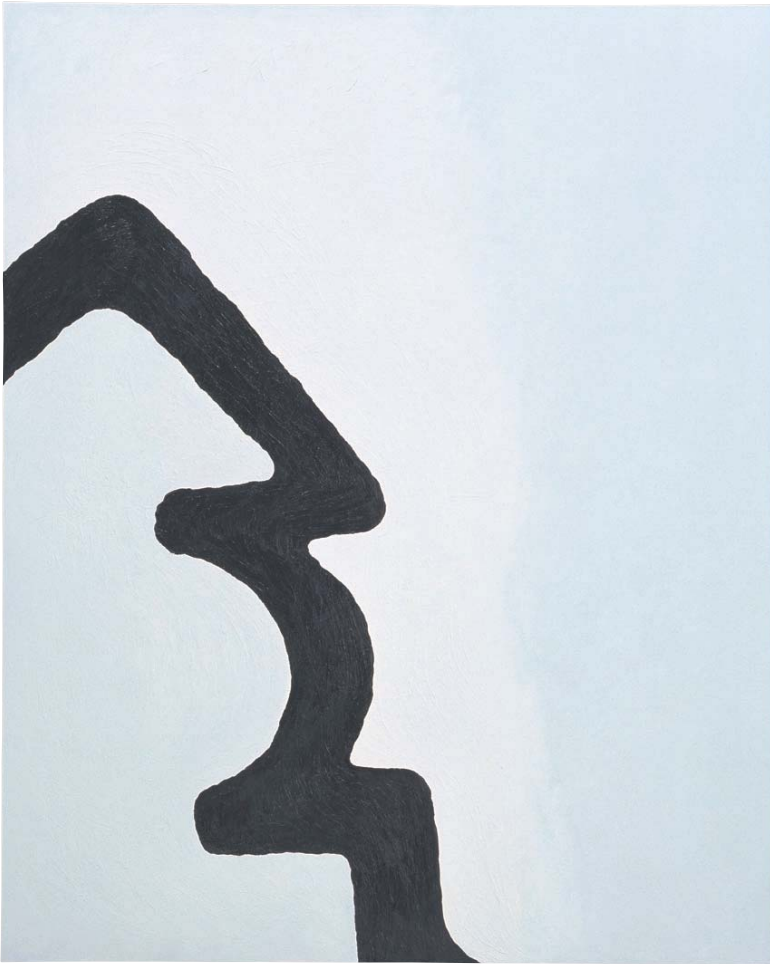
選んだ美術家たちにとっては、84年春に来日したヨーゼフ・ボイスの存在が小さくなかったはずだが、宮嶋の場合は、留学というより、生活の拠点を移すという感じ」でデュッセルドルフに渡った。エルンストやホルスト・ヤンセンへの憧れと同時に、この国の安い生活費とアーティスト・ビザを取れることが大きかった。

大学の同級生だったO・JUNや戸川英夫も、やがてその街にきた。歴史ある美術アカデミーでは86年に他界したボイスも生前に教鞭を執っていたし、地理的にオランダやベルギーに近い。そんなデュッセルドルフを選んだことが、宮嶋には幸いした。ドイツに限らずオランダ、ベルギーでも、絵を描いている人材が予想以上に多く、80、90年代と確実に形象的絵画へとシフトしていた。マルレーネ・ネウマスの登場を同時代的に見るなど、抽象表現主義的な絵画が目立っていた日本とは異なる環境で絵画の力を確信し、宮嶋は自らのスタイルをじっくり模索することができたのである。

当時はドクメンタやミュンスター彫刻プロジェクトなど、大規模な国際展が花盛り。しかし彼の眼をとらえたのは、むしろドイツやオランダ、ベルギーの多くの美術館での常設展示と企画展だった。宮嶋はデ・キリコ、ベックリン、モンドリアン、マグリット、マルセル・ブルータスらの実物をそこで見た。2005年、滞独経験のある作家を集めて東京藝術大学大学美術館で開かれた展覧会「D(n) Brand」の図録に、彼は当時を振り返ってこう記している。「ドイツの画家の作品には生々しさがあります。(中略)彼らは絵に最も勢いがある時点で描き終えています。表面を美しく整えるとき、仕上げるという事よりも画面が立ち上がってくる事に重点を置いているように思えます」。加えて、戦後のドイツにはルードヴィヒ・コレクションに代表されるような、アメリカのポップ・アートの名品が集まっている。宮嶋は、「ドイツの現代美術や美術館から透けて見えるアメリカ」も堪能したのだ。

充実した鑑賞体験の反面、制作上

右ページ 無題 2000 41×31.8cm 綿布にアクリル絵具  
左 おでん 2006 キャンバスに油彩 162.2×130.3cm



## 2001

「油彩画を再開し、筆触の意味が増しました。ながらく《無題》としてきたタイトルも、付けるようになりました」

は、彼は渡独後一年ほど描くことができなかつた。油絵の歴史を担ったヨーロッパは、「古典絵画から現在までがしっかりとつながっている」と感じられた。「油絵は日本に生まれ育った自分には合わないのか」と自問を続けながら、宮嶋は「人間」をモチーフに、まずはドローイング、そして油彩、アクリル絵具で描くようになる。福笑いのような下ぶくれの顔を画面いっぱいに繰り返し描いたが、それは明らかにアジア系の顔だつた。

1997年、帰国を考え始めていた頃、アトリエの白い壁に小さく切った黒い紙を貼り付け、顔の一部を表現した。それがきつかけとなり、背景を描かず、単純化した木、豚（それも屠殺場の……）、吊革などのモチーフを、「できるだけ、何でも描こう」と思って、白地に黒い輪郭線で浮かび上がらせるスタイルで描くようになった。翌年に帰国後も、現在にいたるまでこのスタイルでつくり続けている。

色を制限することで、「色彩の問題を洗い直してみたかった」と考え、

また、「筆触は、画面の要素として、かたちや色彩と同様に重要なものです」と語る。ドイツで見たルノワールや、回顧展に行つたジョルジュ・モランディに魅せられ、「筆触」の問題が宮嶋の心をなごく占めてきたのだ。「油断すると、絵がこぎれいになりすぎる。繊細すぎない絵を心がけています」と、帰国後はとくに筆触のコントロールに集中している。2001年以降、主に油彩で描くようになったのはそのためである。「もたもたした感じが、表現としてやりやすいんです」。画面のサイズも重要で、実物の大きさに接すると、思わず眼は筆触を追わずにいられない。

ところで宮嶋は日本美術、とくに北斎や宗達にも関心を示している。「濃い線で切り取られた内側と外側が気になる」のだという。彼の絵画も、排水口、六叉路、おでんなど、「ポップ」と呼ぶべきかたちが、白地に黒く、太く、「ユアンスのある輪郭線で、「内と外」に区切られる。どのモチーフも、彼には、愛情を注ぎこむ対象ではなく、記号に近いもの」





**みやじま・よういち** 1954年大阪生まれ。82年東京藝術大学大学院修士課程油画専攻修了。88年から98年までドイツ、デュッセルドルフで活動。主な個展に97年「kunstpunkte(スタジオエキジビション)」（デュッセルドルフ市文化局）、98年銀座スルガ台画廠（東京）、99年T&Sギャラリー（東京）、2001年カサヤの森現代美術館（神奈川県）、オン・ギャラリー（大阪）、スピカミュージアム（東京）、02年ギャラリー北村（東京）、03年ギャラリーイセヨシ（東京）、04年ギャラリー覚（東京）、06年void+（東京）、07年KIDO Press（東京）ほか。グループ展に93年クンストラウム・ノイス（スイス）、03年「絵画 単立と連立」（カサヤの森現代美術館）、05年「D/J Brand ドイツに学んだアーティストたちの発火点」展（東京藝術大学大学美術館）ほか。3月4日から22日まで、東京・茅場町のギャラリー・マキで個展を開く。

上下とも デュッセルドルフ時代からの友人、長谷川繁がディレクターを務めるT&Sギャラリーのある、インテリアショップ「TIME&STYLE HOME」にて。作品は2点とも《裸婦》(2006)。T&Sギャラリーでは今秋、O JUN、紫牟田和俊、野村和弘、長谷川とともにグループ展を予定している[\*]



に思えるのだ。近作の裸婦像では、太い輪郭線の「内側」に、ピンク色がほんのりとさしてあり、それが単なる抽象画でなく、確かな、ユモラスな「形象」であることを物語る。

宮嶋は、「描くことに重点を置いた画家」と自認する。今日の日本では絶滅品種ともいふべき、浮世を突き抜けた無頼な表現者なのだ。図版で

は伝わらない筆触の魅力は、同世代の画家たちから強く支持される。筆者は取材時に見た《裸婦》の、ポップと形而上の素つ気ない共存に、21世紀初頭の日本をクールに暗喩する域をすら感じたのだ。

はやし・よういち「美術研究・評論」  
2007年12月20日、東京・自由が丘のT&Sギャラリーにて取材